



<http://shimanouchi-church.org/>

[shimanouchi@ocn.zaq.ne.jp](mailto:shimanouchi@ocn.zaq.ne.jp)



Yasuda Yasuyuki

学院では、母親のための「聖書を学ぶ会」(ティーアワー)が開かれ、そこにも出席しました。その時の先生が春名先生でした。夏頃に小崎先生から、受洗を勧められ、すっと、受けようかなと心が決まりました。そして翌年の4月に受洗しました。

それから、何ごとも神様に祈り、ゆだねることで、心をあだやかに生きることができるようになりました。

やがて、娘も成長し、25歳になった日に「お母さん、25歳になったので洗礼を受けようと思うの」と言われたとき、びっくりにしてすぐに大門先生にお電話して、相談し、受洗の日を迎えました。

そして、いつも祈り、感謝して毎日を送っております。感謝です。

### 新しくポジティブオルガンを迎えて

土橋 薫

この11月末にわたしたちの島之内教会に、新しくマルク・ガルニエ社のポジティブオルガンがやってきました。

2014年1月、大門義和先生の在任期間中に契約、それから20か月以上の期間をへてようやくやってきた、待望のオルガンです。形は小さく、手鍵盤一段だけ、足鍵盤はありません。音色はたった3種類のストップを持つだけ。でもスピーカーではなく、本当にパイプに風が通って音を鳴らす、小さなパイプオルガンです。3種類のパイプ(最も低い音のパイプは木製、他は錫と鉛の合金製)も、オルガンの本体(ケース)の美しい彫刻も、しゃれた椅子のデザイン(高低自在)も、すべて職人さんの手作りです。オルガン本体は楢材(オーク)で蜜蝋仕上げ、鍵盤はツゲの木で日本の椿油で仕上げ、ケースの彫刻には本物の金箔が使われています。11月26日の夕方に埼玉県の工房から車で運びこまれ、その夜と次の27日の午後までかけて、二人の職人さんがこの会堂の響きに合わせてパイプの調整をされました。11月29日第一アドヴェントの日に奉献礼拝をささげることができ、すでに皆さまも礼拝でその音色を体で感じてくださっていることと思います。

何分小さな楽器なので、礼拝の

賛美を支えるために十分なはずと思いがちですが、実は幾分心配してました。しかし河野まり子姉が演奏してくださった12月6日に会堂の一番後ろで聴いてみて、3つのうち2つのストップを使うだけでも、決して弱くなく、豊かで美しい響きが皆さんの賛美をしつかり支えられることが確認できました。あたたかく、透明感のある音色で、風の息遣いが感じられるので、讚美歌も歌いやすいですね。教会員の皆さまも、ぜひ鍵盤に触れて、パイプの息遣いを実感してみてください。

わたしにとっては、この島之内教会で弾く4つめのオルガンです。最初は、今は亡き祖母薄孝子も演奏したヤマハの11ストップ付きリードオルガン、次は西原明牧師の時代から長く使った最初の電子オルガン(クログトーン)で、これがわたしにとってオルガンを始めるきっかけとなったオルガンです。手鍵盤2段と足鍵盤付きのオルガンが教会に入るから、それを弾きなさいと祖母に言われ、東梅田教会の久保田清二先生にレッスンをお願いすることになりましたが、その時にはまさか自分がそれを仕

事にするようになるとは思っていませんでした。受洗もずいぶん後になって、東京&ドイツでの学びを終えてから、西原明牧師のもとで受けました。そんなわたしですが、やはりオルガンを弾くようになったことには、神様の強い導きを思わずにはられません。

礼拝の賛美をささげるために、本当のすばらしい楽器を使えることを、心より感謝して、よりよい賛美ができるように今後ともいっそう努力したいと思います。

### 編集後記

2015年最後の今号には、新しく島之内教会の会員に加わってくださった中村ご夫妻からも、原稿をいただきました。大変うれしく感謝しております。島之内教会に集められるきっかけは、人さまがますが、そこには神様の意思が働いていることを感じます。

そして木戸先生におかれましては、どうぞご健康が守られますよう、教会員一同心よりお祈り申し上げます。(土橋 薫)

### 「救い主をお迎えする」

牧師 木戸 定

ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。

「わたしは荒野で叫ぶ声である。」

ヨハネ福音書一章22節

2015年も、あと残りわずかとなりました。皆さまにとって、今年1年はどんな年だったでしょうか。

私自身にとりましては、神さまから厳しいお叱りをいただいた1年でした。初秋から体調が何となく思わしくなく、かかりつけのお医者さんに紹介状を書いていただき、循環器の専門病院で検査していただいたところ狭心症との診断が下され、11月26日と12月10日と2回にわたって心臓カテーテルの手術をすることになりました。年明け早々もう一回同じ手術をしなけ

ればなりません。

私たちは、聖書を通して神の言葉を聴くことができます。しかし、試験を通して神の言葉を聴くことができます。この試験を通して、神は私に何を気づけと言われているのだろうか。反省すべきことはないだろうか。この試験は私にとって生きよ、と呼びかけているのだろうか、等々これまでの自分の生き方について静かに振り返る時、それが試験の時でもあります。

何よりも反省させられたことは、自分自身の高慢さでした。

ある時、教会にいられた一人の画家が「わたしの作品は、絶望から始まります。何を描いたらいいのかまったく先の見えない絶望的な状況の中で苦悶し、見えてきた光を描く作業、それが私の作品です」と言われました。

私が説教の準備をする作業と同じではないか、と思いました。30年以上講壇に立っているのだから、説教者としてベテランの域に達しており、楽に説教することができるとは思えないか思われる方がいらっしやるかも知れません。ま

た、そいつ牧師もあられることでしょう。なかには、以前した説教の原稿を何年か経って持ち出して、もう一度同じ説教をする方もあられます。しかし、私自身は昔の説教原稿は参考にはなっても恥ずかして同じ話をしようという気にはなれません。やっぱり毎回回産みの苦しみがあります。そして、それでも講壇に立たせていただくことができたのは、聴いてくださる方々のご理解があり、目に見えない力と助けがあったことか言えないものです。「自分ならこの働きができる」、だから説教の奉仕をするのではなく、何よりも講壇に立たせていただけることの恵みに感謝しよう、そして、私がこの立たせていただくには、神さまが私を通して何かを伝えさせようとしておられる、その何かに耳を傾けよう、そうすれば、きっと道が開かれるはずである、それを信じて出来る限りの努力を続けてゆこう、そのような謙虚な気持ちをおられるのではないかと、反省させられました。